

建学発 2016-第一 0079 号

2016年6月15日



大津市長
越 直美 殿

一般社団法人 日本建築学会
会 長 中島正愛

DOCOMOMO Japan による「日本におけるモダン・ムーブメントの建築 197 選」の選定、
および選定建築物の歴史的価値の継承と保全について

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、DOCOMOMO Japan の選定による「日本におけるモダン・ムーブメントの建築 197 選」のひとつにこのたび、大津市庁舎（現 大津市庁舎本館・別館）が新たにリストアップされました。本会では DOCOMOMO Japan と連携し本選定作業に協力しており、大津市庁舎の歴史的、文化的価値について十分認識する立場から、その価値の継承と保全についてご配慮を賜りますようお願い申し上げます。

DOCOMOMO Japan は、日本におけるモダン・ムーブメント（近代運動）の建築についてその保存と記録に関する活動を推進する学術組織で、2000年に設立されました。本会では1999年、建築歴史・意匠委員会内に DOCOMOMO 対応ワーキンググループを設置し、DOCOMOMO Japan 設立のための準備活動を進めました。その後も DOCOMOMO Japan の活動を支援し、「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」の選定について、1999年度に20件、2003年度に80件、2005年度に15件、2006年度に10件、2007年度に10件、2008年度に10件、2009年度に5件、2012年度に14件、2013年度に10件、2014年度に10件、計184件の建築のリストアップを、DOCOMOMO 対応ワーキンググループを通じ DOCOMOMO Japan と協力しながら行ってきました。

大津市庁舎が有する歴史的、文化的価値については、DOCOMOMO Japan による別紙（「日本におけるモダン・ムーブメントの建築 197 選」へのリストアップのご報告、ならびにその歴史的価値の保全についてのお願い）および「記録・評価書」にあるとおりですが、貴下におかれましてはその意義についてご確認いただき、現存の建物およびその周辺環境の保全、維持に格段の御高配を賜りますようお願い申し上げます。

なお、本会ではこの建築の保全に関して、学術的観点からのご相談をお受け致します。

敬具

大津市長
越 直美 殿

DOCOMOMO Japan
代表 松隈洋

大津市庁舎（現 大津市庁舎本館・別館）
の「日本におけるモダン・ムーブメントの建築 197 選」へのリストアップのご報告、
およびその歴史的価値の保全についてのお願い

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、DOCOMOMO Japan ではこのたび、一般社団法人日本建築学会の協力を得て、「日本におけるモダン・ムーブメントの建築 197 選」をとりまとめました。そのひとつとして、大津市庁舎（現 大津市庁舎本館・別館）を選ばせていただきましたので報告させていただくとともに、この建築の歴史的価値の保全にご配慮を賜りますようお願い申し上げます。

DOCOMOMO (=The Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement の略称、「ドコモモ」と読みます) は、モダン・ムーブメント (近代運動) の推進に寄与した建築の歴史的、文化的重要性を訴え、その記録と現存建物の保存に関する活動を展開する国際的学術組織です。1989 年にオランダで設立され、現在は本部 (DOCOMOMO International) をポルトガルのリスボンに置き、60 を越える国・地域が加盟して活動しています。DOCOMOMO Japan はその日本支部で、2000 年に発足しました。その重要な活動のひとつに「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」の代表的作品を選定する作業があり、これまで計 184 件の建築をリストアップしてきました。今回、このリストに 2015 年度に選定された 13 件を新たに加えることになり、大津市庁舎 (現 大津市庁舎本館・別館) がそのひとつとして選定されました。

「モダン・ムーブメント」は 20 世紀の建築の主要な潮流のひとつで、18～19 世紀に端を発する合理主義的、社会改革的な思想や技術革新を背景に、1920～30 年代に西欧で明確な形をとりはじめ、線や面の構成による美学にもとづいた建築を多数生み出してきました。日本においても、1920 年代からその影響を受けた建築が建設され、現存している建物は日本の近代化の足跡を物語るうえで重要な文化的資産と考えられます。こうした観点から DOCOMOMO Japan では、下記の基準にもとづいて、「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」の選定を行なってきました。

- a. 装飾を用いるのではなく、線や面の構成による美学が適用されている。
- b. 技術の成果がデザインに反映されている。
- c. 社会改革的思想が見られる。
- d. 環境形成 (広場や建築群の構成) という観点でデザインされている。

以上のような高い文化的価値と歴史的意義についてあらためてご確認いただき、大津市庁舎およびその周辺環境の保全、維持に格段のご配慮を賜りますようお願い申し上げます。なお、大津市庁舎が有する価値については、別紙の「記録・評価書 (Documentation Fiche)」をご参照ください。

また、DOCOMOMO Japan では、この建築の保全について、必要ある場合は学術的観点からのご相談をお受けいたします。

ご不明の点等ございましたら、下記問い合わせ先までご連絡いただければと存じます。

敬具

【お問い合わせ先】

DOCOMOMO Japan 事務局

email: docomomojapan@yahoo.co.jp URL: <http://docomomojapan.com/> (事務局長 亀井靖子)

2015 年度選定建築物 記録・評価書
Minimum Documentation Fiche 2015

0.1 建物・敷地の写真

外観および内観

写真内容： 大津市庁舎 本館・別館

撮影者およびクレジット： 笠原一人

日時： 2015 年 11 月 24 日



大津市庁舎本館 外観（東から見る）



大津市庁舎本館 外観（南東から見る）



大津市庁舎本館 外観（北東から見る）



大津市庁舎本館 吹き抜け空間



大津市庁舎本館 最上階展望室



大津市庁舎本館 市議会議場



大津市庁舎別館 外観



大津市庁舎別館 玄関ホール

	d b code
1. 建物・建物群・都市計画・ランドスケープ・庭園の名称・住所等	
1.1 現在名称：大津市庁舎本館・別館	3
1.2 旧名称：大津市庁舎	4
1.3 町名：御陵町 3-1	5
1.4 市・区名：大津市	6
1.5 都道府県名：滋賀県	7
1.6 郵便番号：520-8575	8
1.7 国：日本	9
1.8 その他の住所分類（日本の場合なし）：	10
1.9 建物の類別：庁舎	11
1.10 保存の条例、選定、登録文化財等指定：なし	12
2 建物の履歴	
2.1 竣工時の用途・目的：市庁舎	13
2.2 年代：設計および竣工：1967年（本館）	14
2.3 設計者：佐藤武夫	15
2.4 他協力者（構造家・エンジニア等）および施工者：清水建設	16

- 2.5 改修等変更の年代：1971年別館を増築、1989年新館を本館と別館の間に増築、1993年第2別館を別館の北側に増築 17
- 2.6 現在の用途：市庁舎 18
- 2.7 現況の様子：本館1階の市民サービスの部分に若干の増築や改修部分が見られるが、本館・別館ともに、建物の外観および内部において、竣工当時の姿をよく保っている。 19

3 解説

- 3.1 概要：三井寺や弘文天皇陵、近江神宮など歴史的な環境の中に、琵琶湖に面して20建っている。本館の建物は、ジャングルジム状に組んだコンクリート造の柱梁を概観に露出して表現したモダニズム特有のデザインとなっているが、そこに和風のデザインやヨーロッパの古典主義建築が持つ三層構成を巧みに取り込んだものとなっている。またジャングルジム状の柱梁の中に、議会棟を含んだ3つの棟が、T字型の吹き抜け空間を組み込まれた形となっている。吹き抜け空間は、屋根が架けられて雨は入らないが外気が入り込む、いわゆる半屋外空間となっている。市庁舎としては極めて特徴ある空間構成やデザインを持つ。その後建てられた別館も小ぶりではあるが本館同様のコンクリートの柱梁構造を露出したもので、中央にオランダや北欧の庁舎建築に見られる室内型の大きなホールを内包している。いずれも特命で佐藤武夫に設計が依頼された。佐藤は、旭川庁舎の設計により1959年に日本建築学会賞を受賞するなど、戦後の庁舎建築の設計に優れた実績を残していたため、設計者に指名されたと見られる。 20
- 3.2 構造・施工：（本館）鉄骨鉄筋コンクリート造・地上5階・地下1階建て 21
- 3.3 周辺環境：建物は、本館・別館ともに、県道47号線と京阪電鉄石山坂本線の別所22駅や線路沿いに東向きに建っている。道路と線路のさらに東側には、皇子山運動公園や陸上競技場があり、さらにその東側500mほどのところに国道161号線、琵琶湖競艇場、琵琶湖が連なっている。また建物の西側200mほどのところから、京都市の大文字山に連なる山が迫り、敷地のすぐ裏には弘文天皇陵がある。敷地の南側には三井寺、北側には近江神宮が建ち並ぶ。本館と別館の間には、現在新館が建ってしまっているが、竣工当時は駐車場として大きく空けられていた。これは、市庁舎裏にある弘文天皇陵や背後の歴史的な山並みを意識したためだったという。 22

4 評価

- 4.1 技術性：建物は、本館・別館ともに、ジャングルジム状に組み合わせられた鉄骨鉄筋コンクリート造の柱梁によって支えられている。中でも本館では、柱梁の全体の中に議会棟など3つの棟が、T字型の吹き抜け空間を挟んで組み込まれている。梁は断面が矩形のものが用いられているが、柱部分は丸柱となっており、木造のようなデザインに見える。また中に組み込まれた議会棟は、柱梁から内側に離して設けられた別の柱梁で支えられるなど、単なるラーメン構造とは異なる構造技術が採用されている点に特徴がある。 23
- 4.2 社会性：当該建物は、本館・別館ともに、竣工当初から市庁舎として使われ、24現在も市庁舎として使われており、市民にとっても親しみのあるものとなっている。しかも、滋賀県や大津市にとって欠かせない琵琶湖に面して建ち、歴史ある大津の街にふさわしい伝統的な日本建築の性格を併せ持つモダニズム建築となっている。また天智天皇の水時計の故事がある街のため時計塔をデザインしてほしいと言われて大きな時計塔を設計したという。竣工以来、現在も変わらず、大津

のシンボルとして存在している建物だと言える。

- 4.3 文化・審美性： 大津市庁舎本館は、一見、柱梁を均等に配したラーメン構造をそのまま見せたモダニズム建築の典型のように見える。しかし1階が地盤面より階段を上った少し高い位置に設定され、「市民デッキ」と称される半屋外の空間を内包して基壇をなし、その上にオフィス空間を備えた建物の壁面、最上階には建物全体を大きく張り出してフラットな屋根が覆っており、ヨーロッパの古典主義建築の特徴である三層構成をなしている。それによって建物をシンボリックに仕立てられ、格調高いものとなっている。

また、大津市庁舎本館および別館に共通する特徴として、和風建築の特徴を取り入れていることが挙げられる。独立した円柱と梁によって構成された建物は、木造の伝統的な建築を鉄筋コンクリートに置き換えたものである。外部に面して設置された窓上部の格子など、細部にも和風のデザインが見られる。また本館3階に設けられた議場では、ラワン材を多用してデザインした町家の格子を連想させる壁面や和風の格天井を連想させる天井面が美しい。日本では1950年代後半から60年代を通じて、こうした日本の伝統的な木造建築を鉄筋コンクリートで表現する試みがなされるが、こうした時代の建築デザインのテーマを反映したものだと言える。

- 4.4 歴史的背景： 我が国では、1950年代から60年代にかけて、地方自治体の庁舎建築が続き、戦後民主主義の体制を反映した新しい庁舎建築のあり方が、建築界の大きな課題となっていた。そんな中で、清水市庁舎（1954年／丹下健三設計）、東京都庁舎（1957年／同）、岡山県庁舎（1957年／前川國男設計）、羽島市庁舎（1959年／坂倉準三設計）など、数多くの優れた庁舎建築が生まれた。典型的なものは、東京都庁舎など丹下健三が設計したもので、ピロティ部分を「市民ホール」とした開放的で明快なものであった。

佐藤の設計による庁舎建築もまた、大津市庁舎を含めて、こうした時代の最中に建設されたものが多い。しかしそのデザインは丹下らのものとはやや異なる。明快なモダニズムの構成やデザインによるものではあるが、塔や塔状の建物による記念性が強い表現となっていること、さらにその建物が煉瓦タイルを用いた素朴でややロマンチックな表現となっていることに特徴がある。中でも大津市庁舎については、琵琶湖に面して明快な建物のヴォリュームを象徴的に配置し、その脇には時計が設置された大きな塔が建つなど、佐藤の他の庁舎建築に通じる特徴を備えている。しかし最上階の大きなフラットな屋根面の下に、小さなヴォリュームが隙間を持って配されるという構成や和風の寺院建築を連想させるデザインは、他の佐藤の庁舎建築にも見られない大津市庁舎独自のものである。

- 4.5 総合評価： この建物は、柱と梁を組み合わせたラーメン構造を強調したモダニズム建築の典型的なものでありながら、基壇や屋根を強調したヨーロッパの古典主義建築を彷彿とさせる三層構成を持ち、さらに格子状のデザインや寺院建築の本殿を彷彿とさせる和風のデザインをも併せ持つ。それはモダニズムが問い直され、曲がり角に差し掛かった1960年代後半の時代性をよく表すものである。

また、庁舎建築として見ても、1950年代から60年代の典型的な庁舎建築の特性を保ちながらも、シンボリックな建物や高い時計塔を組み合わせ、建物を内部で3棟に分けてその間に吹き抜け空間を設けたり、最上階から琵琶湖に面した展望室を備えたりするなど、独自の庁舎建築の空間となっている。大津という歴史と自然に満ちた環境に対する、佐藤ならではの回答を読み取れる。時代性と地域性、そして典型性と固有性をすべて兼ね備えた、大変優れた建築であると位置づけられる。

2015年頃から耐震改修が大きな課題となっているようであるが、当該建物の歴史的文化的価値を十分踏まえた改修を行い、今後も活用し続けることが望まし

い。

5 資料・文献

- | | | |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 5.1 | 一次資料（初出誌）および重要資料：（本館）『近代建築』1967年5月号／
『SD』1967年8月号／『建築画報』1971年8月号／『現代日本建築家全集 7
佐藤武夫とその事務所』、三一書房、1971年／石田潤一郎「大津市庁舎－湖面に
開く舞台－」、『関西のモダニズム建築』、淡交社、2014年 | 28 |
| 5.2 | 画像に関する資料提供者：笠原一人（撮影・提供） | 29 |
| 5.3 | 記載者（日付）：笠原一人（2016年5月5日） | 30 |